

## 春の江戸絵画まつり ふつうの系譜「奇想」があるなら

### 「ふつう」もありますー京の絵画と敦賀コレクション

府中市美術館 2022.03.12～05.08



「伊藤若冲」「曾我蕭白」「歌川国芳」・・・「日本画」の美術展で現在人気を集めているのは、かつて「辻惟雄」氏の著書『奇想の系譜』で取り上げられた「奇想の画家」たちが中心である。だが、本来「奇想」とは「ふつう」があっこそ成立するものである。本展は「敦賀市立美術館」のコレクションから選りすぐりの作品を展示するもので、「日本美術」の正統である「ふつう」の系譜を紹介している。

やまと絵や円山四条派など、ひたすら美を追求した画家たちの作品により、美しい「非奇想」に浸ることができる催事である。



岸矩（がんく）（駒）《猛虎図》部分 一幅 絹本墨図 江戸時代中期

虎図は岸駒といわれる程人気があり、眼光の鋭さ、口角の威圧感は非凡な迫力がある作品で、毛皮、頭蓋骨、足骨を手に入れて観察して仕上げたという。

狩野雅信 《菊花図》（双福左） 二幅 絹本着色 江戸時代後期

華麗な描写技法のひとつである「勾勒描」を巧みに駆使して、細微な描線で左右幅それぞれに菊花が描かれている左側部分の作品である。

松村景文《月・山桜小禽・山茶花鴛鴦（エンオウ）》三幅 絹本着色 1837年  
三幅合わせて日本で愛でられ好画題の「雪月花」を表わした作品である。